

はじめに

ようやく人類は、植民地に関する戦争やイデオロギーの違いに因る戦争から解放されたかに見えた。しかし、いっこうに戦争は無くならないのみか、以前にも増して根本的な、宗教に基づく価値観の違いによる争いが顕在化してきた。そして、その事は争う当事者の不幸は当然ながら、人類の将来にも重大な危機をもたらす可能性がある。

この事に対して、多様な価値観を認め合えば、と言う意見がある。しかし、政治的緊急避難としての提言なら納得できるが、根本的解決を前提としての提言であるとなると、やはり、宗教、信仰について認識不足と言わざるを得ない。

自らの生きる根本を否定される事は、生きる事を否定された事であり、戦わざるを得ない事になるのである。そして、我が神こそ唯一であり、彼の神は錯誤に基づくものである

と言う意識構造に依つて互いに否定しあっているのである。そこには和解の余地はないのが普通である。

實在の宇宙、世界は一つであり、これらのものが帰着する所は一つである事は自明である。これらの食い違いが生ずる原因は、全ての宗教が神と言ひ、仏と言ひ、如来と言つたその実体が明らかにされていないが故に起こる。つまり、觀念の領域に止まり、實在として提示して捉えられていないが故である。

更に、何故に明らかにされないかと言へば、これを極めるには優れた哲學的直感力が必要であり、一般の生活者にとつて困難な事だからである。そこで全ての人の生活にプラス価値をもたらそうとする宗教の創始者は、實在としての実体を知つてか、或いは知らずに直感的にか、信ずるべきその実体を神とか、如来とか、言ひ、一般の生活者の理解しやすい形に置き換えて同じ効果を期したのである。当然ながら地域的生活条件の違いから、それぞれの宗教には、それぞれの固有の特徴はあるが、その事はそれ程問題ではない。

ならば絶望的なのかと言へば、そうではない、唯一つ、西曆前一世紀以降に北西インドに於いて成文化され、シルクロードのオアシス国家龜茲国（現代のクチャ）の鳩摩羅什に

依つて完成された妙法蓮華經には、この神と言ひ、如来と言つた、実体が明確に明かされてあり、その実体こそ日蓮大聖人の教えである、南無妙法蓮華經なのである。

今日の諸学の發達や教育水準を考えると、かなりの人がこの実体を理解、把握し、至福の道に入れる可能性がある。

そして、少なくとも世界の各宗教の指導者が、この実体について理解出来る様になれば、觀念の我が神、彼の神と言う対立から解放され、対立から協調への道が開けるであろう。

この人類究極の光である南無妙法蓮華經と、その解説をした妙法蓮華經の單なる項目的な解説書ではなく、宗教に馴染みの少ない人々を対象に仏教用語を努めて避けて判かり易く要点を述べてみたい。そして、此の書が世界の平和に微細でも貢献出来る事を念願して捧げる。

生木利春

目次

(一) 妙法蓮華經について……………一頁

- 仏教の成立
- 鳩摩羅什について
- 妙法蓮華經の成文化
- 月氏の仏教

(二) 南無妙法蓮華經とは……………九頁

- 妙法についての考察
- 渡辺 格（いたる）氏の小論文「生命の科学」を評す
- 天台智顛と一念三千
- 十界の生命
- 仏界と他の九界との関係
- 本因妙に至る方法
- 若退若出のこと
- 如来壽量品と時間概念
- 十如是について
- 日蓮大聖人と天台智顛
- 久遠元初とは
- 見宝塔のこと

(三) 究極の同一を目指して・・・四五頁

○宗教者の合同会合

○五重の相對

○更に宗教を比較する

○更に教義から比較する

(四) 本尊について・・・六一頁

○あれこれ拝むのは良い事か

○紙や木に字を書いたものが何故本尊か

○日蓮大聖人の本尊

○本因妙大本尊

○日蓮大聖人法華經の行者の事

○本因妙大本尊の髭

(五) 宗教の頂点 三大秘法・・・七一頁

○三大秘法

○本門戒壇

○天照大神

(六) 天皇の条件と八尺瓊勾玉・・・七七頁

○八尺瓊勾玉

○日本国の正統皇統とは

(七) 後醍醐天皇と王仏冥号・・・八七頁

○日蓮大聖人の御遺命

○日目上人の一族（小野寺党）と建武の中興

○日目上人の天奏

○明徳の和議に依って本門寺建設

(八) 日蓮大聖人の御生涯・・・九七頁

○時代背景

○日蓮大聖人の出生

○日蓮大聖人の立宗

○幕府への国諫

○小松原の法難

○竜口の法難

○佐渡流罪

○身延山

(九) 身延山を富士に遷す・・・・・・・・一〇七頁

○釈迦立像

○白蓮坊と蓮蔵坊

(十) 応化の本仏は三時三化・・・・・・・・一一一頁

○天台の応化の解釈

○如来壽量品第十六に述べられた本仏の三時三化

○遣使還告について

○本因妙大本尊の下部の讃文

(十一) 電子メールによるQ&A・・・・・・・・一一九頁

妙法蓮華經について

(一) 妙法蓮華經 (みようほうれんげきょう) について

妙法蓮華經は、我々が日常生活では覚知出来ない、しかしながら、それこそ本当の我々の存在の在り方である。南無妙法蓮華經 と言う実体を二十八品(章)にわたって説明し、その屬性、在り方、また百年千年を単位で人類への展開の仕方まで述べられている。

そして、この妙法蓮華經の予言どおりに、人類の知性の運動は展開され、現に展開されつつあるのである。

仏教の成立

今日一般的に仏教と言えば、西暦紀元前五世紀の頃、インド北部の小さな一族国家の族長の一家に、世継ぎとして生まれたゴータマ・シッタルータが開教者で、その教えが次第に東アジア全体に広がったとするのが一般的である。これに対して大乘非仏説を唱える人達は、大乘教典の成文化された時期が西暦紀元前一世紀以降に主に北西インドに於いて成文化している事を理由に仏説では無いと説明している。

しかし、中国の僧、法頭の伝えるところに依れば、彼は399年から414年にインドを旅行した、その時、経典はもっぱら口伝され、文字と書が用いられないことを伝えている。釈迦の入滅から、ざあつと覽ても八百から九百年経っている。その時点においてもインド仏教に於いては口伝が行われていた事になる。

大乘非仏説は経典が文字に記された時期を主たる根拠としているが、上記の様なインドの伝統からすれば、釈迦が生前に説いた大乘仏教を弟子たちが文字に記さなかったとしても、何ら不自然ではない。

また、これらに後世に文が付加されたとしても、主要な法理に影響を与えない限り、大乘教典が釈迦仏の直説を含まないと言う事にはならない。

大乘教典もゴータマをブツタとして理想人格化して、或るいは神格化して編纂されている為に当然仏教として、ギリシャ彫刻の影響に依って出来た仏像と共に東アジア全体に広がったのである。

大乘であれ、小乗であれ、足跡を辿る追確認であり、教典は真言密教をのぞく殆どの教典でそうした立場で成文化されている。

妙法蓮華經の成文化

前一世紀以降、主に西北インドに於いて始まった成文化の運動は、ヒンズー教の強い影響のもとに密教（我が国で真言宗）が成立し、その他の大乘教典が次々と成文化された。そうした運動と共に、妙法蓮華經も成文化された。

こうした運動の中で、上座部は自らを正統仏教として、大乘仏教側を非仏説と言って差別した。これに対して、大乘仏教側は原点派を自らの悟りに主眼を置いた小さな乗り物と言う意味を込め、小乗と言って差別した。

こうした仏教の伝播は、一点から始まって次第に広がると言うイメージでは無く、少なくとも中国への広がりには成文化の時期と共に同時進行と言うに近い。そして、至高の聖典とされる妙法蓮華經はシロクロードのオアシス国家、亀茲国（現代のクチャ）の鳩摩羅什（三世紀中頃から四世紀初頭）に依って、中国於いて漢訳され伝えられた。

鳩摩羅什（くまらじゅう）について

その没年は四百十三年で七十才であろうといわれている。タクラマカン砂漠を擁したタリム盆地の北側を通るシルクロードのオアシス国家である亀茲国（現代のクチャ）に、亀

茲国国王の王妹を母として生まれた。諸教典を学び、そして後、妙法蓮華経と言う比類ない教えを学び、無欠な仏教教典として訳した大成者である。

その高弟、僧肇の「鳩摩羅什法師誄」によれば、「七歳の時出家して諸学、諸教を修め十二才の時、母の故郷、月氏の亀茲国に帰り活躍した。のち、後秦の弘始三年（401）秦王姚興により国士として長安に招かれ多数の教典を訳出した。秦王姚興はその天分を惜しみ、法の跡継ぎが欲しいため、王命で女性を受けさせた」とある。

月氏の仏教

日本に於ける仏教者の間にもインドの事を「身毒」と呼ぶ人がある。例えば、「南身毒の竜樹」と言ったりする。まるで口にしただけで全身に毒が回りそうな名称である。しかし、特別な意味がある訳ではない

中華思想の選民意識が付けた名称である事は明らかである。天照大神・日御子を卑弥呼と言う様なものである。シンドウ（インド）の音写で申毒・新陶・辛頭・信度・信図等とも表記されている。この身毒は「史記」に於いて使われた表記である。

日蓮大聖人は「月氏の仏教」と仰せである。仏教と言えば一般的にはインドと言う事であるが、インド即月氏ではない。

月氏族はタクラマカン砂漠を擁したタリム盆地の中に於いて、他民族の圧力に依つて周辺を彷徨う様に移動し、その一部は中央アジアにまで移動した部族である。中華の後漢時代の歴史書、「後漢書」西域伝によれば、「月氏民族は中華の西北辺域で遊牧生活をしてきたが匈奴との戦いに破れ、西に移動し、バクトリア地方を征服して定住した。元の土地に止まった部分を小月氏と呼び、移動した部分を大月氏と呼ぶとある。

この大月氏は五大諸侯に分かれていたが、その中のクシャーナ族が強力となり、クシャーナ王として独立して、バクトリア地方を平定して更に南下してガンダーラ地方（仏像彫刻発生の地）を征服した。王が八十才で死ぬと、その嫡子ウエマー・カドフィセスが王位を継ぎ、インドの東南深くにまで領土を広げ、栄えた。」と伝えられている。これら事を踏まえて覽れば、西北インドを中心に、その時代としては月氏である。

これらの事を踏まえて大まかな仏教の流れを俯瞰してみると、何より大きな前提となる事は、普遍救済的大乗仏教は、東西文明が行き交うシルクロードと関わりを持つ、その周辺に於いて存在したと言うことである。東西のあらゆる宗教、思想、文物が交流存在し、

それ等、月氏族やその他、中央アジアに定着した諸民族こそ、大乘仏教の担い手であった訳である。此の地は永い間、東西文化の行き交う世界最先端の開けた地域であったのである。

南無妙法蓮華經とは

(二) 南無妙法蓮華經とは

天地人を貫き、三世を貫く、自身と共に全宇宙の久遠の実相である、と云っておく。しかし、こうした言葉で言い尽くせている訳ではない。この事が判れば全てについて理解が出来たと云ってよいのである。しかし、数限り無く述べられている様に、なかなか正確な理解を得るのは難しい。そこで、大まかな構図を先ず述べて、後、詳説する事としたい。

南無とは、語源はパーリー語で「命を帰す」と言う意味であり、その音をサンスクリットが写し、更に漢語に写したものである。

妙法とは、宇宙万物、万象を在り在らしめる、永遠の、宇宙根本の力・存在

蓮華とは、妙法に因って、万物がその姿形を発顕する様の原因と結果の関係を蓮華と云う。

経とは、狭義には教えであるが、これらの現象活動の総体の発する音声。

妙法についての考察

ある本に仮死体験のことが書かれていた、その人の言われるには、もう死んだのだなあと思われて後、自我が各々の臓器に分裂していった、とあった。果たしてそうなのだろうか、しかし、考えてみると土いじりをしていてミミズを二つや三つに分断したとき、それぞれは同じ様に跳ね動いている、臓器も同じ様なものであろう。

これらの事を通して判ることは、我々の自我は我々の身体に等しく分布していることがわかる。

此の身体を二分し、さらに二分し、さらに……としていき、およそ八十五回から八十八回位すればこの宇宙の一切に通じた基本的構成要素である原子、さらに、原子を構成する基本的要素に行き着きます。この時点では「有情（動物）非情（植物や鉱物）一切平等」と言い表しています。当然、それ



れは質量と、それに付帯した波動の存在であり、心と体が接合した一極であります。自律神経によつて統括されるものより更に中枢、定かを極める事が難しい一点である、と同時に全宇宙でもあります。それが「妙」と言う一極であり、無量義経徳行品に三十四個の非定形を以て示された実体、つまり、我等共有の一念（自分）でもあり、宇宙全体でもあります。（つまり、この宇宙の自分と自分の自分は同じ自分である）

有る、といつても目には見えません、では無いかといえは厳然とあり、その「妙」の法（波動）により我々は姿形をもち固有名詞を持つに至る。つまり、妙と妙に備わる波動（法）により、宇宙の一切は生みなされ形をなしている。

我々の一念（自分）はこの宇宙と共に、いつ始まったか判らない、久遠元初という言葉がまさに一番適当である。初めも終わりもなく常にある久遠元初の妙法こそ永遠の実体である。

そして再び統治能力を無くして元の万物共通の妙法に立ち還るのを死と称しているのである。しかし、自分と言うものは、初めも終わりもなく、この宇宙と共に続いているのである。

宇宙は我々の身体の皮膚の際まできている、否、全ての細胞の芯まで宇宙そのものである。つまり、我々はこの宇宙と等質な宇宙人なのである。

渡辺 格（いたる）氏の小論文 「生命の科学」を評す

氏は序論に於いてポルツマンのエントロピー増大による宇宙滅亡説をあげこれを基調にして説明をされ、文明はその途上の逆行現象であると述べられている。

氏が設定される宇宙論を是として、初めに「ある非常に大きなエネルギー」があつて、それが分散していき今日になつたとしても、今までの年数は我々が思い描く事が出来ない莫大な数になるだろう。亦、今日から宇宙が消滅するまでも計測不能の年数になるだろう。この様なことは殆ど問題とする必要はない事であり、氏は要するに宇宙有限説を述べておられるのであろう。

しかし、ここに於ける氏の述べ方は一般の人には、近未来に宇宙がその秩序を失い消滅すると取られかねない。氏があまりにも著名な学者であるため、例え仮説として述べられ

でも、事実として受け取られてしまう。教育を旨とする氏にあつては、尚一考を要する事であろうか。

世界観、宇宙観は、人類の歴史とともに様々に変遷してきた。その中でも大きなものをあげるとコペルニクスの地動説であろう。

今日、科学における人類が知り得た事を基準にして、様々な推測や仮説が成され、その全体像を統一的に説明する試みがなされている。しかし、未だ科学の知りうる事は限られた部分にしか過ぎず、その全体像を把握するには無理がある。また新しい発見によつて従来の見解は塗り替えられるであろう。

本論にいつて、氏は分子生物学の日本における第一人者であられ、DNAにおける学識は比類無いと思われる。しかし、読み進む内に、おや？と気がついたのだが、氏は生命というものを、妊娠年月日から死亡年月日までの個体の活動体系と捉え、また個体から個体への橋渡し現象と捉えている。それ故、DNAをして物質から生命へと述べられている訳が判つたが、それは早計である。極端な言い方をすれば、それは、消化器の構造や働きが判つたから物質から生命への筋道がついた、と言うに等しい。何故なら、DNAが、種としての個体を構成する全てに関わっているとんでも生命それ自体ではないからです。また

、何よりもDNA自体物質であつて、物質と自我が接合するのはDNAをも構成する更に基本的構成要素に於いてである。物質と波動が同一視される極小、極限のポイントに於いてである。その極限のポイントは科学に於いても、今尚、定かを極める事が出来ない一点であると同時に全宇宙である。

この宇宙の一切に普遍の極小の一点に備わる波動（エネルギー）こそ生命と呼ぶべきものであり、DNAを備えている、いないに関わらず全ての存在する物質の中枢をなしている。ここに言う中枢とはより細分化された全体、と言う意味である。これは、我々自身の中枢をもなしており、私は、中樞的共我とも、中樞的共身とも呼ぶことにしている。当然ながら、この中樞的共身は時間、空間の制約外の存在である。これは理論上の帰結ではありません。自身の中に自覚できるものである、どうすれば自覚出来るか、というと、あらゆる自分に染みついている既成概念を取り払えば自覚できるようになる。その際、妙法蓮華経は最高の指針となるだろう、否、妙法蓮華経以外にはない。

氏の言われる生命とは、この中樞的共身の波動に依つてDNAに従つて、種としての個体が姿形を顕し始めてから、再び個体がその統治能力を失い元の中樞的共身に還るまでを

指しており、つまり生命の持つ生を指しており、元の中核的共身に還った状態を死と称しているのである、生も死も生命の持つ在り方に他ならない。

さて、その中核的共身のエネルギーは何処から来るのかは判らない。なぜあるのか、と尋ねられても、この宇宙がなぜあるのか、と、尋ねられたと同じで、あるからあるとしか答えられない。ただ存在する全てがそうであろうと思われるが、少なくとも人間に於いては、この中核的共身に指向性をもっている。ところが、まま、この指向性を失った者もいて、それはあたかも生命次元における自己疎外といった趣を呈し、個人であれ集団であれ、学者であれ、勤労者であれその活動力が低下したり、精神異常をきたしたりする。いずれの場合も最終的には生きることに困難を感じるようになる。それは何に依って起こるかと言えば、観念形態がそれを否定する形になっている場合である。

私はこの指向性を回復させ、澁刺として、山あり谷ありの生を楽しみ切って生活されるように、この指向性の回復作業と中核的共身を事実として確認する事の手伝いが私の仕事と心得るものである。

天台智顓（てんだいちぎ）と一念三千（いちねんさんぜん）

天台智顓（538～597）は南岳大師に学び、後、天台山を本拠とした故に天台大師と呼ばれ、また智者大師と呼ばれた、漢民族の傑出した仏教指導者であり、天台宗の開祖である。この天台智顓の述べた法華経の哲理、一念三千論は広く知られている。

我が国の伝教大師（767～822）は、中国天台宗の中興の祖と言われる妙楽大師の弟子、道邃和尚に学び、比叡山延暦寺を開いた。

仏典の成文化には、小乗教、そして大乘教の成文化は時期の違い等、様々な違った条件で出揃った。その間最低でも五・六百年位の時間差がある。これ等数多くの成文化した教典の本質を見抜き、特徴や高下深淺をわきまえ、これ等を仏教の開教者の一代の説法として纏めあげ、五時八教としたのは、先人の功績もあるが、外ならぬ天台智顓の功績である。

五時八教とは、説法の順序に従って 華嚴時 阿含時 法等時 般若時 法華涅槃時と五に区分される。また、八教とは教えの内容による区分を 藏教 通教 別教 円教 頓教 漸教 秘密教 不定教 と八つに分類する。本稿にとって余り重要でないので一々の

説明は省く。

この天台宗の一念三千についてであるが、

一念とは

よく言う何かを為そうとしての一心な心と言う意味ではなく、純粹に哲學的な事柄であり、我々が自分と言うものを認知している自我の実体を指している。

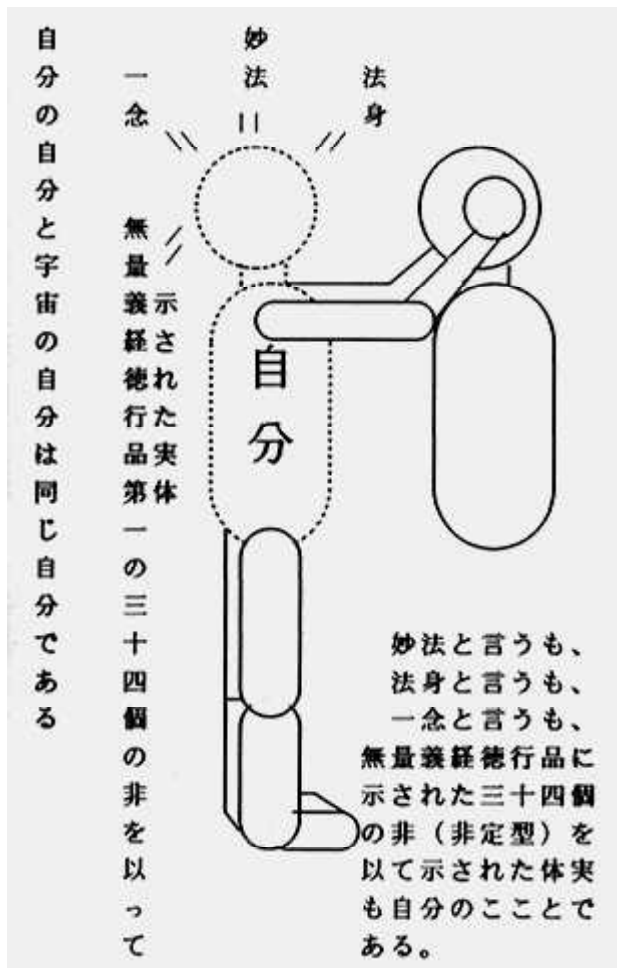
三千とは

簡単に言えば森羅万象と言うことである。

更に言えば、三千の新羅万象は、我々の全ての存在と通じた自我実体（自分）に包摂されていると言うことである。また、逆に全ての存在と通じた自我実体（自分）のエネルギーに因って、三千の新羅万象は発動、在り、在らしめられていると言う事である。

自分について

仏教を修学する上に於いて、どうしても知らなくては境界を深めようがない、という重



自分の自分と宇宙の自分は同じ自分である

大な認識がある。それは、この世界の森羅万象は種々のものが雑多にそれぞれが存在する様に見えるが、実はそうではなくその全てを包括した、唯一法に因って在り在らしめ

られていると言う事です。森羅万象である十界三千については次ぎの十界の生命に譲り、これらを在り在らしめている一法に就いて詳しく述べてみます。

妙法蓮華經 無量義經説法品第二に・・無量義は一法より生ず・・と言う有名な文言があるのはこの事であります。またこの一法は無相である、と述べられている、つまり、姿形も、匂いも、音も、味も何も無い一法である、と言っているのです。

さて、この無相の一法に就いて無量義經徳義行品第一には「・・大いなる哉大悟大聖主（仏、生命）・・その身は 有に非ず亦無に非ず、因に非ず、縁に非ず、自他に非ず、方に非ず、円に非ず、長短に非ず、出に非ず、没に非ず、生滅に非ず、造に非ず、起に非ず、為作に非ず、座に非ず、臥に非ず行往に非ず、動に非ず、転に非ず、閑静に非ず、進に非ず、退に非ず、案危に非ず、是に非ず、非に非ず、得失に非ず、彼に非ず、此に非ず、去来に非ず、青に非ず、黄に非ず、赤白に非ず、紅に非ず、紫種々の色に非ず・・」とあります。

この様な述べ方でしか表せない実体とは如何なるものか、およそ日常的な 時間 空間

の制約下にある事象の概念の外の事であることは判る。これは自分（自我実体）の事を述べているのであります。うへの・・・その身は・・・と言う所に・・・自分（自我実体）は、と入れて読めば解つてくる。自分と言うものは、有る、と言つても掴み出して見せる訳にはいきません、では、無いのかと言えば無い訳でなく、ちゃんと前を見ていて考えたりしています。有に非ず 亦無に非ずであります。自分の自分はこの宇宙の自分と同じ自分であり、他人の自分とも同じ自分であり、自他に非ずであります。また、自分はこの宇宙と共に何時始まったか、何時終わるのか解らないのですから生滅に非ずであります。この三十四の 非ず を以て示された実体は正に自分の事なのです。

また、一念三千に於ける一念も自分の事であり、この一念はよく使われている様な何かを成そうとしての一心な心、と意味でわ無く、何もなく普通の状態の自分、と言つた方が近い。三千とは簡単に言えば森羅万象の事であり、この森羅万象は一念つまり自分が包摂していると言う哲理であります。しかし、これは静的なものでなく念々と発動し来るものです。また、法身如来と言うも自分の事であり、妙法と言うも自分の事なのであります。まさに仏法とは、この宇宙や他と一体になっている自分自身の事を説いているのであります。

これ等、生命の同一性は一般論としてのコンピューターネットワークと酷似している、全てでのコンピューターはそれぞれ個々に在るにも関わらず、同一のものとして振る舞える。この個であると同時に全体と一体になったネットワークに例えれば理解し易いのではないだろうか。

唯、生命（仏法）に於けるネットワークは存在するもの何一物も残さず、全宇宙のネットワークである。この永遠のネットワークはアクセス権等と言ったものは無く、すでに全てのもがフルアクセスで重なり合っているのです。それに気付かないだけです。

日蓮大聖人は「一生成仏抄」と云う御述作に於いて、「・・・・抑も妙とは何と云ふ心ぞや只我が一念の心思議しがたきなる処を妙とは云ふなり、思議しがたしとは心も及ばず語も及ばずと云う事なり。然ればすなわち、起る処の一念の心を尋ねみれば、有りと云はんとすれば色も質もなし、無しと云はんとすれば様々に心起る。有と思うべきにも非ず、無と思うべきにも非ず、有無の二の語も及ばず、有無の二の心も及ばず。有無に非ずして、而も有無に編して、中道一実の妙体にて思議及ばざるを名付けて妙とは云うなり。この妙なる心を名付けて法とも云うなり。此の法門の思議しがたきをあらはずに譬えを事法にかたどりて蓮華と名づく・・・・」とあります。

十界の生命

我々は現実の生活に於いて、様々に喜怒哀楽、希望や絶望等の多様な感情の中に生活している。しかし、この様な多様に起滅している感情も、生命と言う基盤が感じている実感から観ると、十の範疇にある。例えば、「欲しい」と言っても自動車であったり、靴であったり、大臣の椅子であったり、食物であったり、恋人であったり、その他様々な局面がある。これ等それぞれは違う場面ではあるが、「欲しい」と言う渴きを感じている生命の状態は同じであり、仏教ではこの状態を「餓鬼界」と名付けている。これに準じて名付けられた範疇が他に九界あり、併せて「十界」の範疇に全ての現象は収まる。地獄界・餓鬼界・畜生界・修羅界・人界・天界・声聞界・縁覚界・菩薩界・仏界である。

地獄界

自らの力で跳ね返す事のできない閉息状態にあつて、にえつく様な苦しさを感じている境涯 地獄の様な、と言われる状態はまさしく地獄界である。

餓鬼界

上の所で説明をした欲する状態。

畜生界

我々も動物としての側面を持っており、その動物的側面だけに囚われて、人間としての英知のかけらも発動していない状態。大を恐れ、小を侮る犬や猫並の状態。

修羅界

他に勝ろうと葛藤している状態、特徴として自らを実体より大きく見せようとする。修羅の巷と言うのはまさしく修羅界の現象である。

人界

欲望もコンスタントに満たされ、平らかな状態。

天界

まさしく天にも昇る状態の時、しかし、この状態は長続きしない。足が地につかない状態。

しょうもんかい

声聞界

先の六種の状態を六道と言って、欲望を中心にして次々と順序不同に変化する状態を六道輪廻と言う。この欲望に振り回された生活を反省し、より良い主体を確立したいという学習的態度、反省的自我

えんかくかい

縁覚界

芸術家等が作品に打ち込む三昧境から自然や事物の真理の一側面を悟る状態。

菩薩界

他の幸せを心から願う状態、例えば、子供が病気で苦しんでいる時、出来る事なら替わってやりたい、と思う親心は菩薩界の一部である。

仏界

これら九界の世界の全てが、妙法蓮華経と言う此の實在の世界を在り在らしめる一法が、包摂し、発動している事を事実として悟り、九界の衆生にこの事を説く者。

以上の十界の生命は固定的なものではなく、一瞬一瞬、次にどの界がくるかしれず、順序不同である。こうした状態を十界のそれぞれが更に十界を備えているとし、十界互具と称している。次にどの界がくるか知れない、と言っても行為の習慣性によつて概ねその界にあると言う傾向性がある。これを一般には業と称している。良い幸せな界の業を深くしなければならぬ。このような状態を十界掛け十界で百界と言う。以上の述べてきた事は生

命の内容の違いと言う側面からの観かたである。

また、統一的観点から観た時十如是となる。妙法蓮華經方便品第二の「諸法実相 所謂諸法 如是相 如是性 如是体 如是力 如是作 如因 如是縁 如是果 如是報 如是本末究竟等」である。眼前の在るがままの諸法（存在現象）が、そのまま真実な実相である。そして敢えて理論付けして観るところなる。相は姿形で、性は内在する性質、体は相性を合わせた本質的自体、力は内在する力、作は前の力が外に働きかける、因は現象の直接的原因、縁は因を助ける間接的原因、果は因縁の働きの結果、報は結果が外に（最初の相に）表れる事、つまり、瞬時に備わる生命の一貫したサイクルを本末究竟等と述べている。しかし、十如是が確定的に内在すると思ひこむ事は実体と離れる。

これ等は如何なる形而上学的觀念に依つて構築された觀念の色眼鏡も、日常的觀念や価値観にもとづく概念も排除して、如実に在るがままを具に観ていく仏教の姿勢から割り出された現実である。ともあれ、この十如是は十界の全てにわたる共通の範疇である。この十如是と先の百界を一応掛けたとして十如是と言う。

更に具体的存在としての観点から三世間が提示される五陰世間 衆生世間 国土世間で

ある。五陰は個体の身心体系 衆生は十界のどの衆生か 国土はその衆生が感じ、住する環境、当然ながら十界の衆生はそれぞれに違った世界に住している。例えば地獄界の時、光に満ちあふれた晴朗な世界に居る訳はなく、焼けた鉄の中に閉じこめられた様な環境世界にいる。この様な違いを国土世間と言う。世間とは違いのことである。

ちなみに、地獄界は赤鉄 人界は大地 天界は宮殿 声聞界と縁覚界は方便土 菩薩界は実報土 仏は寂光土と譬えられる。此の三つを先の千に更に乗じて三千と言ひ、実在の全てを表している。つまり三千とは森羅万象の事である。

一念三千とは、森羅万象である三千を一念つまり自分（自我実体）が包摂している、と言う仏法の極理である。しかし、この哲理は天台が述べたものであり、今日極めて一般に知られている為、それに沿って述べた。本門は更に一重立ち入った極意を述べる究極の宗門である。

十如是（じゅうによぜ）について

妙法蓮華經方便品第二は、妙法蓮華經二十八品（章）の内、妙法蓮華經如来寿命品第十六とともに重要な品（章）で重要な哲理が説かれている。

「爾時世尊 從三昧 安詳而起 告舍利弗・・・・・止舍利弗 不須復説 所以者何 仏所成就 第一希有 難解之法 唯仏与仏 乃能究儘 諸法実相 所謂諸法 如是相 如是性 如是体 如是力 如是作 如是因 如是縁 如是果 如是報 如是本末究竟等・・・・」

とあり諸仏の知恵は甚だ深く広大であり、一般の学問的知識を以ては、とうてい知る事ができない。仏が成就している極めて希な解し難いこの法は、仏と仏だけが窮め儘している。世界の真実な姿（実相）はこの眼前に在るが儘の世界（諸法）こそ実相である、と述べている。

しかし、私達は生活の上に於いて容易に在るが儘の世界を見る事はできません。それは私達の日常は此の世とあの世といった様な様々な既成概念や善悪等の価値観による色眼鏡

で世界を見ている為在るが儘の世界を見ていないのです、日常の生活は相對世界にある為抜きがたい對稱概念もあり、これらの一切を排除して觀る世界の在るが儘こそ、実相である、と云うのが諸法即実相つまり諸法実相という事です。そうして、所謂諸法 如是相 如是性 如是体 如是力 如是作 如是因 如是緣 如是果 如是報 如是本末究竟等、と結んでいる。最初の如是相、如是性、如是体が一まとまりで、相は生命の外に現れた姿形で性は内在する性質、体は相性を合わせた生命の本体、力は内在する力、作は前の力が外に働きかける、因は現象の直接的原因、緣は因を助ける間接的原因、果は因緣の働きの結果、報は結果が外（相）に表れる事、つまり生命の一瞬に一貫しているながれを本末究竟等と述べている。しかし、この十如是の範疇が確定的に内在すると思ひこむのは、それ自体概念となり実体とかけ離れる。何処にも漏れる事が無く首尾一致している事を順序立てて説明している、と捉える方が実体に即している。

さて、これに拠って何が判るか、と云うことであるが、今まで仏の仏界と九界の間には隔絶があつて全然違う存在と思つていたのに、全ての現象は十如是であり、当然、仏の仏界も九界も十如是で差別がなく衆生と同列の存在と云うことです。即ち仏は仏界の衆生と云う事です。しかし、同列と云つても仏界の衆生は人間として最高の境涯にある尊い衆

生である事に変わりはありません。

結論的に云えば、この十界の依報（住する環境、国土世間）正報（五陰を構成する個体、衆生世間）の一切、つまり世界の一切は何一つ残さず妙法蓮華経という包括する一法の姿である事を暗示している。

さらに、妙法蓮華経方便第二の長行に於いて、仏が世に出現した目的は、衆生の仏の知見を開き示し、悟らせ、入らしめる為であると述べている。

日蓮大聖人は諸法実相抄に「・・・諸法実相乃至本末究竟等云々、この経文の意如何、答えて云く下も地獄界より、上仏界まで十界の依正の当体悉く一法も残さず妙法蓮華経のすがたなりと云う経文なり・・・」と述べられている。更に「・・・釈迦・多宝（仏界）の二仏と云うも妙法等の五字（妙法蓮華経）より用（はたらき）の利益を施し給う時・事相（具体的姿）に二仏と顕れて・・・」と述べられ、妙法蓮華経と云う本門の波動を体とするのが本仏で釈迦・多宝はそのはたらきとして顕れた迹仏（実体の本仏に対しての影）の仏であると述べられている。更に「・・・故に「仏は用（はたらき）の三身にして迹仏なり、凡夫は体の三身にして本仏なり・・・然れども迷悟の不同にして生仏・異なる依つ

て俱体・俱用の三身と云う事をば衆生しらざるなり」と仰せられている。

仏界と他の九界との関係

日蓮大聖人は「三世諸仏総勘文教相廢立」と言う論文において「夫れ一代聖教とは総て五十年の説教なりこれを一切教とは言うなり、これを分かちて二と為す、一には化他、二には自行なり、一には化他の経とは法華経より前の四十二年の間説き給える諸の経教なり此れおぼ權教（ごんきょう）と云い亦は方便と名づく、・・・・五時の中には華嚴（けごん）阿含（あごん）方等（ほうとう）般若（はんによ）なり法華経より前の四時の経教なり、又十界の中には前の九法界なり、又夢と寤（うつつ、目覚めた状態）の中には夢中の善悪なり又夢をば權と云い寤をば実と云うなり、是の故に夢は仮に有つて体性無し故に名けて權（ごん・かり）云うなり、寤は常住にして不変の心の体なるが故に此を名けて実と為す、故に四十二年の諸の経教は生死の夢の中の善悪の事を説く故に權教と言う、夢中の衆生を誘引し驚覺して法華経の寤と成さんと思し召しての支度方便の経教なり故に權教という、斯れに因つて文字の読みを糾して心得可きなり、故に權をば かり と読む

権（かり）なる事の手本には夢を以て本と為す又実をば まこと と読む事実の手本は寤なり、故に生死の夢は権（かり）にして性体無ければ権（かり）なる事の手本なり故に妄想と云う、本覺の寤は実にして生滅を離れたる心なれば真実の手本なり故に実相と云う・
・・・

少し注釈をつけると、仏界を除く九界は生死の夢の中であり、法華經を除く他の經教は法華經を説く為の準備をする為に説かれたものであり、九界の生死の夢の中の教義であると述べられている、従ってこれ等を依經とする宗派の述べる所では即身成仏はあり得ない。

仏界

九界

寤

夢

生死を離れた常住世界

生死の夢の中

実教

権教

自行

化他

妙法蓮華經

華嚴、阿含、方等、般若

更に「・・・止觀に云わく・昔 莊周と云うもの有り、夢に胡蝶となつて一百年を経たり苦は多く樂は少なく汗水と成つて驚きぬれば胡蝶にも成らず百年をも経ず苦も無く樂

も無く皆虚事なり皆妄想なり・弘決に云わく・無明（九界）は夢の蝶の如く三千は百年の如し一念実無きは猶蝶に非ざるが如く三千も亦無きこと年を積むに非るが如し・此の釈は即身成仏の証拠なり 夢に蝶と成る時も莊周は異ならず寤に蝶と成らず思う時も別の莊周無し、我が身を生死の凡夫なりと思う時は夢に蝶に成るが如く僻目・僻思いなり、我が身は本覚の如来なりと思う時は本の莊周なるが如し即身成仏なり蝶の身を以て成仏すと云うに非ざるなり・・・・・

この例えで解る様に成仏とは成るのでは無く元々の此の宇宙の一切と一体になった本当の自分自身を開き顕すことである。

更に「・・・・・止観に云わく・無明癡惑（九界）もとより是れ法性癡迷を以ての故に法性変じて無明と作り諸の顛倒の善不善等を起こす寒来たりて水を結べば変じて堅氷と作るが如く又眠来たりて心を変ずれば種々の夢有るが如し今まさに諸の顛倒は即ち是法性なり一ならず異ならずと体すべし、顛倒起滅すること旋火輪の如しと雖も顛倒の起滅を信ぜずして唯此の心ただ是法性なりと信ず、起は是法性の起滅は是法性の滅なり其れを体するに実には起滅せざるを妄りに起滅すとおもえり只妄想を指すに悉く是れ法性なり、法性を以て法性に繋げ法性を以て法性を念ず常に法性ならざる時無し・・是くの如く法性ならざる

隙も無き理の法性に夢の蝶の如く無明に於て実有の思い生じて之に迷うなり・・・」と。

日蓮大聖人と天台智顛

一言にして言えば、天台智顛が理解した妙法蓮華經に於ける妙法に対する理解と日蓮大聖人が本門と言う条件に於いてお示しの妙法は理解が違うのである。

天台智顛の教えは理論上であるのに対して、日蓮大聖人の教えは実在そのもの教えである。

例えれば、全く相似形であっても天台智顛の教えは水面に写った虚像であり、日蓮大聖人の教えは実体である。この事を、迹門（虚像）と本門（実体）という。

天台智顛は「妙」を不可思議、つまり、思議出来ないものとしたのに対して、日蓮大聖人は宇宙万象の根本の因であるとして、本因妙と言われ、その境涯に整合した発声のリズムの実体を南無妙法蓮華經の七文字に留められ本尊とされた。従って日蓮大聖人の御述べになる妙法とは正確には「本因妙」と呼ばなければならない。

本因妙に至る方法

仏道修行に於いて簡略な方法があるとは思わないが、今日に於いては非常に恵まれた環境にあり、総合的知識レベルも高い。そこで此処に本因妙に至る方法を試みてみる。

しかしながら仏教の説く所は、言葉に於いて的確な表現が不可能な実体を何とか言葉で以て伝えようとしているのであるから、ある種の飛躍は避けられない。従って、そんな馬鹿な、と思われる人もあると思うがお付き合いを願いたい。

さて、小高い丘が上がって見慣れた大地とその景色をじっと見てみましょう。遠くに山々は連なり、広がる平地には家々が建ち並ぶ、広大な宇宙は上下、左右、前後に広がっている。

先ず第一に、この眼前の世界を自分が作った箱庭と思い込んでじっくりと見る。しかしながら、どうしても自分が作った箱庭と思えない。でわ、此の世界はあなたを含めてあなたが作ったのではないなら何者が作ったのでしょうか。地球を創り、数知れない生物の営み、広大な宇宙天体を生成せしめ、一時も休み無くこの箱庭の世界を変転させているのは何者の仕業でしょうか。ある意味では科学も此の正体を知る為の探求をしている訳で

す。

現代の物理学を踏まえた世界像は我々の身体も含めてあらゆる物質と云うものは、その究極の本質はエネルギーであると捉えている。逆に云えば、我々の眼前に見える世界を構成している全ての物質は、最初に非常に大きなエネルギーがあつて、そのエネルギーが何らかのアクセシビリティによつて質量に転化したと考えられる。しかしながらこの過程メカニズムは今日の科学では殆ど判らない。

世界はこの最初の非常に大きなエネルギーがエネルギーとして使えなくなる拡散、消耗の過程にあり、総体としては拡散消耗の過程にありながら随所にその逆に周囲のエネルギーを集積する逆行現象を起こす。この逆行するものが広い意味で生物であり、人間の文明はその最たるものであるといふのである。

この現実の世界の箱庭は、その形相を想像出来ない初発の膨大なエネルギーに拠つて存在し、変転の途上にあるのである。そして我々自身もこの初発のエネルギーに拠つて創られた物質に拠つて身体髪膚を構成し、その身体に即した初発のエネルギー（一念、自我）に拠つて生活しているのである。

我々の自我が念々と起こり来る所のものと宇宙初発のエネルギーは同じものであり、こ

の初発のエネルギーを如々として受け、用なれば如来と称し万物の根本なれば本因妙と称するのである。万物に平等に降り注ぐ慈雨の様に宇宙世界の全てを包摂して在り在らしめている根本因ゆえに本因妙であり、本門のリズムなのです。そして本因妙大本尊にお示しの如く唱える題目こそが「事」なのであり本門なのであります。

さて、再び箱庭を見ましよう。眼前に日常の意味を失ったパノラマがあるなら、あなたは人という類を代表して宇宙の一角に立っています。一身一念は宇宙と一体と成っており、自分自身が逆に宇宙を包み返しているのです。自身の内に念々と起り来るものはこの世界を在り在らしめている初発のエネルギーと全く同じものであり唱える題目は久遠元初のエネルギーであり無始の古仏であります。万物に平等な慈雨の様なこの久遠元初のエネルギーに拠って、淨も穢も、善も悪も、六道も、六道を嫌う二乗も、二乗の一枚上手のエゴイズムを憎む菩薩乗にも全てに等しく関わり発動している。

仏道修行はこの日常的な既成概念から脱却して真実な在るが儘の世界を見る事の出来る様になる事こそ仏道修行のゆえんと考える。

また、何人なりと雖も本人が知らないだけでこの如来に基づく存在で在る事は事実であり、万人は万有に同化した不滅の境涯を開ける可能性を持っている。

久遠元初とは

ある酒造メーカーのテレビの宣伝に「千年も一瞬のなれの果て」と言う文言があった。千年であろうが、万年であろうが、宇宙開闢以来であろうが一瞬のなれの果てと言える。実在するのは連続する一瞬の今である。

この今にあつて、時空を發動する根本の本因の妙こそ永遠変わらざる実体である。この本因の妙に因つて在り在らしめられて、無限変転進化の途上にあるのが、形相として自身も含めた宇宙である。そして若退若出をしているのである。

久遠とはこの常住常在する絶える事のない今の本当の姿を指しており、元初とは宇宙初発のエネルギー・存在である根本因の妙の代名詞である。これらは当然自身がその当体でもある訳である。

全ての新羅万象は唯一法に因つて包摂されて存在する事を教えたのが迹門であり、就中妙法蓮華経方便品第二にこの事が示されている。

その一法に軸を移すと、その一法の実体は宇宙開闢以前からの存在であり、無始無終である、この眼前の世界こそ永遠であり、常住常在する世界である事がわかる。この事を集中的に教えたのが妙法蓮華経如来寿量品第十六である。

そして、この久遠元初の南無妙法蓮華經は当然「十界」と言う命の感じる差別を包含しており、この「十界の生命」も若退若出、つまり、若出、生死が一緒になった側つまり生の側にも、若退、死だけの側にも同時に亘っていると言う事である。

若退若出（にやくたいにやくしゅつ）のこと

一般的によく言い習わしている言葉に、死んであの世に往く、と言う言葉がある。この言葉の意味する所は、死んだら生きて活動した此の世とは、次元を異にする別天地があると想定した言葉である。

しかし、法華經の説く所は、その様な別天地は無いのだと述べている。此の世だけしか無く、生命は此の世に於いて、生という在り方と死と言う在り方の二通りの在り方があり、ずーと続いているのだと述べている。つまり、何処か不可解な別天地に往くとか、または永遠の消滅であるとかいう言う意味の死と言う言葉にあたる事象は存在しないのだと述べているのです。

生命は唯一の此の眼前の世に有つてずーと続いていて、目に見える姿を採って出現した

り、また、目に見えない姿と成って退いたり、しているのが真実な姿であると。更に言えば、生きている時は、死と生が同時に在って生活し、死ぬ時は死の側だけの存在となると言うことである。もつと突き詰めて云えば、生の側とか死の側とか云うものすら無い、今、此処に、全て、永遠であり、永遠の実相に立つ時若退若出と言う言葉が一番適切だと言う事である。

この様に述べれば、貴方は多生の記憶をお持ちか、と言われる方もあるかもしれないが、例えを以て言えば、雨の降る原理を万人は知っていますが、ご自分で太平洋上の蒸発する水蒸気を確認したり上空で冷気に触れ、雲になり、更に大きな粒と成って雨となるのを確認した訳ではないと思いますが、こうした原理に依って雨が降るのは事実であり疑う余地はありません。それは、科学と言う目を以て見るが故であります。

南無妙法蓮華経の目を以て観れば上記の様な事柄は疑う余地の無い事実なのであります。それが故に常住であり、常在なのです。

見宝塔（けんほうとう）のこと

日蓮大聖人は三世諸佛総勘文教相廢立に「・・・過去と未来と現在とは三なりと雖も一念の心中の理なれば無分別なり・・・」と、述べられている。つまり、過去と未来と現在とは三つのようであるが、それは觀念であり、実在としては分ける事が出来ないものである。と、眞実な姿は「今」だけが存在する、と。

此の今に於いて我々が生きるとは、生と死を同時に持つて生きているのである。更に言えば、死のエネルギーに因つて生きているのである。

生死一大事血脈抄に「・・・此の妙法蓮華經の五字過去遠遠劫より己方寸時も離れざる血脈なり、妙は死・法は生なり此の生死の二法が十界の当体なり又これを当体蓮華とも云うなり、・・・天地・陰陽・日月・五星・地獄・乃至仏果・生死の二法に非ずと云うことなし、是の如く生死も唯妙法蓮華經の生死なり・・・然れば久遠実成の釈尊と皆成仏道の法華經と我等衆生との三つ全く差別無しと解りて妙法蓮華經と唱え奉る処を生死一大事の血脈とは云うなり、・・・」と、因みに、此の「三つ全く差別無し」と云うことは二つや三つの瓶に水を入れて、各々の量が全く同じ、と云う事ではなく、大きな器に

全ての瓶の水を入れた状態を云う。

戻つて、我々は此の眼前の世界以外に何処に行く必要も無く、此の眼前の自分の中に全
てがある、逆に自分が無ければ世界は無い（純粹に哲学的意味に於いて）、此の眼前こそ
久遠なのである。

この様な自覚に基づく時、この宇宙と一体に成つた自分を発見する。自らが宇宙と一体
の大宝塔なのである。誤解を避ける為に少し付け加えれば、この大宝塔は誰用と云う事は
無い、一人のものでもあり、全ての人と融合した共有のものでもある。一二三の一ではな
く、是しかなしい如来の一義なのである。眞実、眞実の一大事の大宝塔なのである。大本尊、
推して知るべしである。

如来壽量品（によらいじゅりょうぼん）と時間概念

我々は日常的には時間に対して、一点から始まって一本の線の如く流れてゆく時間の概
念を持っている。如来壽量品はこうした時間の概念に沿って述べられている。

或る酒造メーカーのコマーシャルで、千年も一瞬のなれの果て、と言う文言があつた。
千年であろうが万年であろうが一瞬のなれの果てである。実在するのは過去と未来が交叉

する今しかない。夜がきて昼がきても今の今しかない、百年経っても、千年経っても今の今しかない。日蓮大聖人は「・・・過去・現代未来は三なりと雖も一念の心中の理なれば無分別なり・・・」とお述べになり、やはり、今しかないと仰せである。

この今にあつて現象宇宙を在り在らしめ、進化変転している根本である「妙」は超時空であり、この妙こそ我等自身をも在らしめている本体である。

主観の側から述べれば、この妙は自身の自分（一念）であり、妙が自分自身の本体と知れば自身が超時空の当体と成る。これは理屈ではなく自我の本当の姿に気付き存在の全てと自身が一体と成つた大我の世界に入り、時間・変転・無常と無関係の途方もない幸福な境涯と成る。

如来寿量品は日常の時間概念に沿つて述べられてはいるが、非常に長遠な過去から自分は佛であつたと誘導して、久遠において佛であつたと述べ、時空の全てを包摂した実在の「今」においての本当の存在の境涯を教え導いている。

究極の同一を目指して

(三) 究極の同一を目指して

宗教者の合同会合



世界には様々な宗教がある。ヒンドゥー教、バラモン教、ジャイナ教、ユダヤ教、イスラム教、儒教、キリスト教そのキリスト教にも多数の派がある。その他にも我々が知らない地域的な宗教も数限りなくある。また、歴史を遡れば現代は無くなってしまった、或いは殆ど陰を潜めてしまった大宗教も数ある。大乘仏教だけでも数多くの経典が成立し、各々がそれぞれの経典に基ずき宗派を定めている。

近年に成って、宗教の違いによる地域紛争が頻発している為か、宗教者による合同会合が持たれる。方向としては間違っていない、武力に依って争うより、集まって話し合う場を持つ事自体進歩と考えるべきであろう。しかし、こ

これらの会合が真剣な自分の信ずる所を主張し、討論、研鑽の場ではなく、単に互いを認め合う野合の場であるなら、何も良い結果を生ぜず単なる墮落をもたらすだけであろう。

やはり、こうした運動の芽を正しく育てる為には、南無妙法蓮華經と言う、その至るべき極の旗を高々と掲げていなくてはならない。そうして自らが神と言ひ仏と言つて信じてきたものの実体（南無妙法蓮華經）を知り、その**実体が他者を分かつ事の出来ない**ものである事を知れば、大きく意識改革は進むであろう。

この旗を掲げる場であり、価値観を共有する場を日蓮大聖人は「本門の戒壇」といわれ、他の「本門の本尊」と「本門の題目」と共に定められている。

五重の相對

五重の相對は、究極の実在である「南無妙法蓮華經」を頂点として、比較検討して高下、優劣を判定する 批判原理である。宗教は先に述べた様に多数ある、各々がそれぞれの世界観を展開し宗義を定めている、これではどの宗教が勝っているか劣っているのか判らない、そこで比較対照して位置づけを行う。五重と言う様に大きく五つに分け対比する。

内外相對

内道と外道の相對と言う意味である。内道とは仏教全般を指している。何故なら、仏教の大前提は、尊い信ずべきものは宇宙にまで遍満する自身の内に在るとする為、内道と呼ばれる。これに対して、外道とは信ずべき神等と呼ぶ尊いものは自分の外に在るとするのである。これが如何なる結果をもたらすかは、仏教に於いては、人自身に尊いものが備わっている為、基本的には人間の尊嚴に結びつく構造を持っている。

これに比べ外道は神は尊いが人間はかけがえのない尊嚴なものと成り得ない構造があり、神のために異教徒を殺戮する宗教戦争を大手を振って行える。キリスト教やイスラム教の歴史は、今日の我々には考えられない様な血塗られた歴史である。イスラム教の一部は現に今でも武力による拡大を行おうとしている。

一方、仏教の歴史にはこうした歴史はない、例外的に、我が国に於いては戦鬪的な念仏集団に依って滅ぼされた大名が有った程度である。この他にも、多少の事は有ったにせよ外道の歴史とは明らかに違う。

大小相對

また、教義をみても、仏教は因果の理法の上に立つて教えを説くのに對して、外道はこれを無視して觀念の創造による教義を述べる。日蓮大聖人は「一生成仏抄」と言う御述作に於いて「・・己心の外に法ありと思わば貧窮の者が日夜隣りの宝を数えたらんが如し・・」と御述べになつておられる。

つまり、内道が勝れているのは自明である。

同じ仏教の中於いて大乘教と小乗教の相對と言う事である。大乘教とは普遍救済的で多くの人を永く救う大きな乗り物、と言う意味である。今日、我々の身近にある殆どの寺はこの大乘教の寺である。

小乗教は自らの救いと言う面に重点を於いた戒律主義で、特定の人たちを短い期間しか救えない小さな乗り物と言う意味である。我が国では鎌倉時代以降は衰えてしまい、今日殆ど耳にする事はない。当然、

大乘教が勝れている。

権実相對

こんじつそうたい

同じ大乘教の中に於いて、権教と実教の相對と云うことである。権とは仮と云うことであり、実大乘教の妙法蓮華經に至る為の仮の教えと云う位置にある教えで、この教えは、觀念的な非現実な世界を設定したり、仏像を設えたりして、眞実の生命の眞相は説かない、言ふなれば妙法蓮華經に至る為の仮の教えである。華嚴、法相、淨土、禪、眞言、三論宗の依り所とする教は、実大乘教の妙法蓮華經に比べれば劣っているのである。

本迹相對

ほんしやくそうたい

妙法蓮華經に於ける本門と迹門の相對と云うことである。妙法蓮華經二十八品の内、序品第一から安樂行品第十四までの前十四品を迹門といい、涌出品第十五から勧發品第二十八迄の後十四品を本門と云う。

迹門は理論上の実相観を説き仏道を修めるのは、全ての人が一仏乗と開き顕わす事だと述べている。この中で重要なのは前に述べた方便品第二である。

これに対して、本門は事実の上に立って、永遠の生命を述べ宇宙の実相を明かしている。当然、本門が実体で迹門はその影と言う事であり、存在の実体に立って永遠の生命を明かす、と言う点に於いて、迹門との距離は大きい。本門の要は、如来壽量品第十六である。例えば、迹門を巨木だとして、権教、を草木とすれば、本門は上空三千メートルからこれを見ている様なものである。

しゅだつそうたい

種脱相對

仏が仏になる為の種が「南無妙法蓮華經」であり、妙法蓮華經、本門にはこの種の存在を暗示し、実体の上での、その属性や在り方、また、その素晴らしさ等を述べている。これを脱として種脱相對と

している。

この知性の運動を穀物のサイクルに例えて種を蒔き、成熟して、脱すると言うのである。

仏が仏で在るための種が日蓮大聖人に依って眼前に有る為、現代の我々はこの仏と讃えられた人と全く同じ立場に直ぐに立てるのである。

日蓮大聖人が定められた「本門の本尊」を信じる時、この種熟脱は同時に備わるのである。

八万四千法蔵と呼ばれる一切の教経もこの種子を知る為の勉強であり、その他の人類の人文的知的遺産を学ぶ事も究極的にはこの種子を知りたいが為である。何と有り難い事である。

更に宗教を比較する

浄土宗やキリスト教と南無妙法蓮華経との対比を、例えを以て解りやすく述べてみたいと思います。

ここに大きい不透明な袋があります。この袋には神とか阿弥陀仏とか書かれ、中には一番大切なものが入っているとやわれ、人々は今日まで大切にしてきました。

次に、その袋の中に半透明の袋が入っていて、この袋は妙法蓮華経と書かれています。次にその半透明を透かしてみると、中に南無妙法蓮華経と書かれた完全に透明な珠が入っています。その南無妙法蓮華経と書かれた透明の珠には、死をあらわす妙法と書かれた玉と、生をあらわす蓮華と書かれた玉の二つが入っています。さて、一番外側の不透明で神とか阿弥陀仏とか書かれた袋は、そのままでは中に何が入っているのかさっぱり判らず、大切にされながらも科学を初めとする興味津々の事柄が外にあつて、そっぽを向かれがちです。キリスト教や、阿弥陀仏を崇拜する浄土教はこの不透明のまままで満足しているため、中身を知る縁を持たないのです。

フランツ・カフカという作家に「城」という小説があります。主人公は神の城に入る為、

城壁の周りを幾度も徘徊したが、ついに城門は見つからなかった、という内容です。この不透明の袋を開き城の中に入るのは法華經の存在を知って可能となるのです。この城門を開き中に入る手引きが述べられた教は他に無く、まさに法華經の独壇場です。そして、この半透明な袋を透かすと中に南無妙法蓮華經と書かれた透明な珠が見えますので、この珠を取り出すと、中には妙法という玉と蓮華という玉が二つあります。生死の二法をあらわしたものですから、死をあらわす妙法だけ、あるいは生をあらわす蓮華だけ入っている訳ではありません。生と死が揃って尊いのです。ところが、一番外側の不透明な袋にとどまるキリスト教や浄土教では死に価値の根本を置き、生は罪であるとし、ひたすら死後浄土（天国）に往生する事を願うべし、と教えるのです。生という現実を自らの人生に於いて前向きに捉え活かす事を阻む教えの何と哀しいことか、生あるもの・形あるものに価値を認めない心の虚しさよ。念仏の唱名やキリスト教の祈りの哀調と、大海原から砂浜に打ち寄せる潮騒の如き本門の題目は、断じて同じものではありません。姿・形の中に神や阿彌陀仏がエッセンスの様にあるのではなく、姿・形あるものがそのまま、けがえのない実在なのです。この世界を苦しみに満ちた所と捉えるか、楽しみにあふれた浄土と捉えるかは自分次第であり、眼前に広がる世界以外に別天地などないのであります。

更に教義から比較する

中国の曇鸞(どんらん)(476〜542)によって始まり、道綽が受け継ぎ更に善導に受け継がれた。日本に於いては法然(ほうねん)(1133〜1212)が開祖である。

その教義は、この世は汚い値打ちのない所であり、死んだ後、阿弥陀如来のいる西方極樂浄土に往く事に価値がある。として、架空の非現実世界を設定して、そこに往く事、つまり死に唯一価値を認めている。そして、一切の自力に依る自己努力を否定して、子供同然に置き、他力本願で阿弥陀仏にすぎる事を教える。

この様な、子供騙しの非現実の物語は現実にはあり得様もない。此の教えの本質を観ると、現実逃避であり、人を頼る他力本願である。こうした宗旨を血肉化したなら、現実の生活は仮住まいであり、本来自分の居る所はもっと別な所に在るのだ、と言う思いが何時もしているであろう。困難に直面して、その壁に立ち向かい破って、更に自己開拓をし成長しなければ成らない時に逃避して、元の位置に墜落して永久に成長の芽は摘まれ、落伍者の様に、人を頼つての生活者に成るであろう。

宗教の怖さは、その人の生命の傾向性を形づくる所にある。こうした生きて幸せに成れ

ない仮住まいの現実逃避の生活の傾向性をつくつてしまふ誤つた宗教こそ人を不幸にする根本なのである。

こうした間違つた傾向性を正すのは、やはり、正しい宗教（正しく本門）によるしかない、それもかなりの歳月を要する。

生も死も共に尊いのであり、生きて自らが自発的意志で何かを為そう、とする時こそ人生の本番なのである。

更に、日本の念仏は法然に依つて間違つてしまった。

法然はその選択集に「一切経を自力聖道門と他力浄土門と大きく二つに分け、自力聖道門は千に一つも成仏出来ない、いたづらものであり、捨てよ、閉じよ、閣おけ、抛なげうて」と言つて彼が分けた自力聖道門に入る阿弥陀仏の実体たる妙法蓮華経を破棄している。

この事は念仏の教義から観ても、救いのない事になる。阿弥陀如来の四十八願の内第十八願である「いかなる罪人悪人でも阿弥陀仏を念ずれば西方十万億土の極楽浄土へ往生する事が出来る。ただし、五逆罪と正法（妙法蓮華経）誹謗の者を除く」とある。五逆罪とは、再び人類に帰れない程の重罪、例えば、尊属殺人もこの五つの重罪の一つ、正法は阿

弥陀仏の実体でなければならぬ妙法蓮華経であり、これを否定すれば実体を失うのみか。自らの命を自らで締め上げる様な困った事になる。従ってその様な事をする者は救えない、と但し書きがあるのである。しかしこれは単に空念仏では終わらないと言う事である。

この正法である妙法蓮華経の比喻品第三には「この経を毀謗する者は休む間の無い地獄に墮つ」とかかれてあり、日蓮大聖人は念仏無間地獄と仰せである。

架空の非現実世界の設定と言う点ではキリスト教も同じように神の国天国を設定する。また、創世記物語りに至っては論ずる余地は無い。

これに対して「南無妙法蓮華経」の日蓮大聖人の法は、過去、現代、未来、三世を貫く久遠元初の本因妙のリズムを七文字の上に載せて、発声の音符として、宇宙と一体と成った自身のお題目として唱えるのである。それは、宇宙本源のエネルギーを我が身が一体となつて顕現しているのである。

他宗門に於いても、大同小異であり端的に言えば、禅宗は「不立文字」と言つて、教典を軽視する。文字に依つて仏の心法を理解するのであつて、これを無視しては幾ら座禅を整えても、縁無き所からの悟達は出来ない、自己過信による仏法破壊の行為である。また、

戒・定・慧の三学と言う修行の三つの範疇の定学に集中するため、禪宗の者の生命は堅く固まったようになり、柔軟な躍動感が全く無くなる。そして、法外な自己過信に陥る。

日蓮大聖人は、仏説である教典に従わないが故に、涅槃經にある「仏の諸説に従わざる者あらば当に知るべし是魔の眷属なり」と言う文を引かれ、「禪宗は天魔の所為」と破折されている。

真言宗は、妙法蓮華經等の一切經は応身の仏（具体的人間）の説法で、大日經は法身大日如来の説法である。大日如来に比較すれば、応身の仏は何も知らない凡下の様なものであり、草履取りにも当たらない、と言うのである。一体、相を持たない、体を持たない法身がどうやって法を説くのか知りたいものである。大日經は応身の仏（具体的人間）が法身の理を教えた方便權經の教えである。

天台流に言えば、法身・報身・応身の三身が一身に成った、具体的人間の応身の仏に依ってこそ、我々は話を聞いたり、教えを受ける事が出来るのである。

この真言宗の悪法たる所以は、この本当の教主である応身の仏（具体的人間）を蔑み悪

口して、架空の大日如来の權威を立てる所にある。この様に本来の主をさしおいてあらぬ權威を持ち込む所から、真言は亡国、亡家、亡人の法であるとされる。

事実、此の法を血肉化するなら、現実の集団生活の中で、眼前の人々を蔑み、中心者を排除しようとする傾向性が現れ、非常に困難な人間関係になる、つまり、病深い大変な權威主義となる。

天台宗は一言で言えば、去年の暦の様なものである。その時機には役立ったが今日には何の役にも立たない。

律宗や華嚴宗や他は、今日人々とあまり深く関わりが無いので省く。

本尊について

(四) 本尊について

あれこれ拝むのは良い事か

凡そ宗教と言うものには、有形、無形を問わず、それぞれに本尊と言うものがある。

本尊とは根本として崇敬するものであり、複数と言う事はあり得ない、根本が複数とは支離滅裂と言うことであり、本尊とは言えない。

原始的アニミズムの役割分担的なものは論外として、あれもこれも拝むと言う事は、信じていないか、それら複数の宗教が本尊とするものは行き着く所同じものなのであるう、と言う想定があつての事であろう。その事を裏返せばそれら複数の宗教が行き着く所の究極の実体を表出していないと認めているのである。

しかし、これでは正しく本尊とは言えない、仮の形の本尊が正確には本尊とは言えないからである。究極の実相の本尊を目指して旅をしなくてはならない。

否、旅の必要は無いのである。日蓮大聖人はその究極の久遠の実相の本尊を「本因妙大本尊」として、既に、我々の眼前に御顕わし下さっているのである。あちこちお参りする

必要は無いのです。否、お参りしてはいけないのです、理解できる、理解出来ないに關係無く、唯一実体の本因妙大本尊に対して不信の咎は免れず、生活の上にマイナス現象がおこるからです。道理として考えても、特上の吟醸酒に水を入れれば、水としても役に立たず、酒としても呑めない事に成ります。

我々はただ、この本因妙大本尊を信じて、お示しの如く題目を唱えるだけで、世に仏と賛嘆された人と同じ立場に即座に立てるのです。

紙や木に字を書いたものが何故本尊か

我々は、日常の様々な局面に於いて文字を書き使つて生活しています。また、我々にとつて最も大事な本因妙大本尊も、板に御文字を以て示されたものであります。では、文字とはいつたい何なのか今一度考え直してみましよう。

ある日、突然、一通の電報が配達され、その電文は「チキトク スグゴイ」であつたとします。受け取つた人は驚き、気もそぞろに慌てて急行列車に飛び乗つて父のもとに駆けつけるであります。だが、この電文を客観的に物として見れば「かた仮名」が九文字書かれた紙片にしか過ぎません。しかし、紙に字が書いてあるだけではないか、と言つ

て見過ごす訳には行きません。それは、その電文に書かれている文字が、それを送った人の思い、気持ち、心そのものである事を疑わないからであります。

私たちは自分の思いとか心を伝える時、声帯（せいたい）を使い、音としての波動（言葉）を発して伝えます。もちろん、たまには心にも無い言葉を発する事もある訳ですが、それは例外として、つまり言葉とは、それを発した人の心そのものである訳です。「心」という、眼に見えない姿、形の無いものを知るのは言葉に於いて知るのであります。言葉は、耳で聞いて判るものであります。その言葉を眼で見ると判る様にしたのが文字であります。つまり、言葉と文字は同じく心そのもの、ということでありあります。ならば、本因妙大本尊の御文字は、御本仏の言葉、御心、魂そのものと拝すべきでありましょう。

日蓮大聖人の本尊

今日、日蓮大聖人を宗祖と崇める宗門は多数ある、しかし、その根本とする本尊に迷っていると言うのが実状である。

ある宗門の責任者は百四十体位ある、と言い、ある団体では大体同じようなお姿をしていれば良いとして、今までと違うものを配布とている所もある。

本尊は根本として尊崇するもので、それを複数認めるといふ事は支離滅裂といふ事である。また、別なものでも良いとするのは、どれも究極の本尊では無い事を逆説的に認めている事になる。

およそ日蓮大聖人を宗祖とする宗門、団体では本尊の中央に南無妙法蓮華經と認めているものを本尊としている。

本因妙大本尊

本因妙大本尊が根本本尊で、一機一縁の本尊はその働きを表している。

天 地 人を貫き、過去 現代 未来を貫く、久遠元初の実相において、如如として発動してくる宇宙本源の本因のリズムを南無妙法蓮華經の七文字の髭にその音符を留めた「本因妙大本尊」が本門の本尊で、その本尊の各人における働きが一機一縁の本尊なのである。

従って、一機一縁の本尊と称するものは、その一々のお姿が違い、同じ人に於いても、若い頃のもの、成長してからのものはお姿が違う。つまり、ある人の、ある時点での記念写真の様なものである。その働きとは、本来マイナス価値をもたらす事象に於いてもプ

ラス価値となすと言う事で、毒を変じて薬となすと譬えられる。

例えば餓鬼界等は自らの欲望であり、本来行き過ぎれば害をなす働きである、しかし、南無妙法蓮華経という全体観に立脚して全体の中の分を弁えての存在であれば、活動力の源泉となり、自他ともに役立つ薬となるのである。

この一機一縁の本尊の特長は、上下の四隅に四大天王と言うガードマンが認められている事である本因妙大本尊にはこうしたセクトは無い。本因妙大本尊が唯一根本本尊でその他は一機一縁の本尊と言うことである。

日蓮大聖人法華経の行者の事

日蓮大聖人は御述作に於いて、御自身が遭われた難に就いて事細かに述べられておられます。これは、難に遭われた事を嘆息しておられる訳ではない、自らが遭われた難が法華経勸持品に述べられている、法華経を弘通する者の遭遇しなければならぬ難と、逐一一致している事を我々に知らしめておられるのです。つまり、法華経が述べようとしている人格体である事を宣言なさっているのです。この事を法華経の行者というのであります。従って、日蓮大聖人は法華経と寸分違わない人であられたのであり本尊は当然、法

華経が説明する本尊なのであります。ならば、宝塔品に述べられたとおりの本尊でなくては成りません、皆令清淨、無有地獄 餓鬼 畜生 及阿修羅 又移諸天人 置於他土 ではなくてはならないのです。根本本尊が一機一縁の本尊である訳がないのです。得入無上道 速成就仏身 は本因妙大本尊様を信じて、お示しの通りに唱題するしか絶対に有り得無いのであります。

日蓮大聖人は本尊とは法華経の行者の一身の当体であると仰せである。

されたのが「本因妙大本尊」なのであります。具体的には七文字の伸ばした髭の長さに本門の題目のリズムをお示しです。この「本門の題目」の働きは世界の人類、否、一切衆生に至福をもたらす事のできる唯一のものであります。現代、単称日蓮宗や、日蓮正宗、創価学会、立正佼成会等が題目と称して唱えている題目の唱え方は本門の題目ではありません。

この本因妙大本尊は全人類の真実の幸福の為に唯一、御本仏日蓮大聖人が顕わされた唯一根本本尊です。